



にかほ市長 市川雄次

## 創造を想像する

### 人々の声に 耳を傾ける

皆

さんこんにちは。今月号からコラムを書かせていただきます。市政運営から日常の出来事まであらゆるテーマを題材としていきます。

1回目の今回は、私の考え方の基本にあるものを紹介させていただきたいと思います。

市長就任の直前まで、私は障がい者の相談支援の仕事をしてきました。本人のみならず、家族を含めたさまざまな人々に福祉サービスを紹介したり、生活設計の組み立てをしたりなどさまざまなお手伝いをしてきました。

ここで、一つのエピソードを紹介します。

市長選挙の時の話になります。ある山間の集落を選挙カーで遊説していた時の話です。時刻にして午後7時50分くらいでした。選挙運動は午後8時までなので、その日の遊説が終わるギリギリの時間です。暗がりや一人の女性がおぼつかない足取りで選挙カーの方に歩み寄ってきました。そして、かほせい声で、「わたし、うつ病なんです。私のような人でも働ける場所を作ってください。」と一言だけ発して、ふらふらつと家の中に戻っていきました。

一目見て、心に病を抱えた方だと思えました。長年、障がい者の支援に携わってきましたが一度もお会いしたことのない方でした。ふだんは家に引きこもっているのだと思います。そんな人が選挙カーに歩み寄って来たのです。すごい勇気だったと思います。

運動期間中、そんな風に一目で障がいがあるなとわかる人たちが、私のそばに寄ってきてくれました。いつもは声を潜めて暮らしている彼女が勇気を振り絞って訴えに来てくれたことに私は心を打たれました。

私たちの社会には、自分の考えをはっきりと言えぬ人と、言えない人がいます。むしろ、ただただ我慢している人の方がたくさんいると思います。政治の真髄は、そのような人たちの声をいかに形にしていくかだと私は思っています。

行政がやらなければならないことはたくさんあります。すべての人に広くサービスを提供するのが行政の役割ではありません。しかしながら、「声なき声」にどのように反応するかで地域の懐の深さが決まると私は考えています。

前述のエピソードもあり、私は先ずは市役所の仕事の中から障がいのある人たちができる作業を拾い出しするよう担当部課に指示しています。このことをもって障がい者の厳しい雇用環境を改善することはできませんが、少なくとも障がい者の社会参加の機会を創り出せるものと考えています。

